

2 評価委員による評価

○ 松尾委員

平成 24 年度に千葉市教育委員会が執行した、主に学校教育に関わる「目標 1 未来を担う人材を育成する」について、総括的な所見を述べることとする。

まず、千葉市教育委員会事務事業の特筆すべき点について述べる。

第一に、施策展開の方向 1－2「社会性を備えた豊かな心をはぐくむ」の取り組みが充実している点が挙げられる。小学校 5 年生での移動教室、小学校 6 年生での農山村留学、中学校 2 年生での自然教室等の体験活動の実施により、児童・生徒の社会性等の向上が確認されている。また、職場体験学習を実施する学校の割合も高く、キャリア教育が効果的に推進されていることが分かる。さらに、埋蔵文化財調査センターの出前講座に参加した児童・生徒数が増加してきていることから、郷土の歴史と文化等を学ぶ機会が十分に提供されつつあることも明らかである。この他、朝読書の推進や子ども読書まつり、文化芸術体験事業等の実施により、豊かな情操を育む教育が充実していることを窺うことができる。

第二に、施策展開の方向 1－4「家庭の教育力を高め、地域の教育力を生かす」については、子育てサロンが行う子育て相談への参加者数や、公民館の小・中学生の学習者数の増加が高く評価できる。その他、学校・家庭・地域連携によるまちづくり推進事業への参加者数が大幅に増加し、地域人材を活用した学校支援が充実していることを読み取れる。

第三に、施策展開の方向 1－8「学校・家庭・地域・行政が一体となって、子どもの成長をサポートする」については、全学校で学校関係者評価を実施し、また、学校ホームページも定期的に更新されている。これらのことは自己評価や学校関係者評価の結果を学校改善に生かそうとしている努力の現れであると読み取ることができる。ホームページを活用して学校の情報を積極的に発信するという取り組みは広く社会全体で子どもの成長を支えるために重要である。さらに、NPO人材活用により、安全体制を整備したり、学校教育活動を充実させたりしていることも評価できる。

その他、「学校の勉強が好きだ」と肯定的に回答する生徒の割合が増加し、とりわけ、「数学の勉強が好き」と肯定的に回答する生徒の割合が全国学力・学習状況調査の結果より高くなっていることも評価できる。これは一人一人の子どもの実態を捉え、少人数指導や学習形態、学習方法の工夫をしていることの成果であると言えよう。また、科学館を授業の一環で利用する市内小学校の割合も増加傾向にあり、学校教育を支えるために、学校外施設が効果的に利用されていることが分かる。さらに、運動部活動地域連携再構築への取り組みも実施され、学校教育を支える地域の人材活用だけでなく、教師の負担軽減という視点からも益々の推進が期待される。

次に、千葉市教育委員会事務事業についての今後の課題を述べる。

第一に、情報教育の充実・推進に関して、教員による ICT の活用は益々重要となってきたが、その一方で、ICT の進展はめざましく、その効果的な活用には日々の研修が必要不可欠である。情報教育に関する出前講座等も実施されているが、ICT 活用のために、学校 C I O²の育成率を高めることだけでなく、学校 C I O の研修のあり方についても検討し、教員による ICT の効果的な活用を促すことが重要である。

第二に、学校施設、設備等の整備に関しては、学校施設の耐震化が急速に進み、平成 26 年度に 100% 完成すること、屋内運動場の非構造部材の耐震化が平成 27 年度に完了することが予定されていること、電子黒板や大型デジタルテレビが各学校及び各学級に設置されたことは評価できることである。その一方で LAN 用コンピュータの整備状況は必ずしも十分とは言えない。9.5 人に一台という台数は政令指定都市中でも低く、さらなる整備拡充が必要であろう。

第三に、学びの連続性を重視した教育を目指した事業としての、小中連携カリキュラムの策定が評価できる。中 1 ギャップをはじめとする様々な問題が生じていることを考えると、小学校から中学校への滑らかな接続は重要であり、小中連携カリキュラムは今後の学校教育の重点となり、この事業に関する今後の期待が高まるだろう。このカリキュラムを実現し、その効果を検証し、その結果を受けて工夫改善し、普及していかなければならない。

第四に、生徒指導調査研究委員会における不登校傾向に対する対応策をまとめた提言（報告書）は特に若年層教員に有用であることが明らかである。しかしながら、指導員配置によって、学習の取り組み状況や生活面が改善した児童生徒の割合や、適応指導教室での活動により学校に復帰できた児童生徒の割合等は目標値に達しておらず、今後重点的に工夫改善す

² 各学校において、学校の情報化等の推進のために、情報機器の管理及び子どもたちの情報機器の活用等について、企画・実践・評価・改善・指導等を統括的に行う資質や力量を有する者。

ることが求められる。担当教員による改善だけにとどまらず、担当教員を支える特別支援や不登校児童生徒への支援のための体制の整備拡充が期待される。

第五に、教職員の資質・指導力の向上に向けて、各種研修が設定されており、教職員のニーズに合わせて、夜間研修、土曜研修に加え、出前講座を実施している点は評価できるが、研修の実質的な効果測定を行うと共に、研修終了後の効果的な人材活用のためのシステムを考えることが重要である。また、教職員のモラル向上に関しては、管理職や教育委員会による指導だけでなく、教員が相互に注意し合える環境づくりについても考えていく必要がある。

第六に、教職員支援に関して、教員の負担軽減への対応や学校問題解決支援体制の整備に関する事業が実施されていることは評価できるが、各種問題状況の詳細な把握を行い、その解決の支援体制を整備していくことは必要かつ急務である。とりわけ、団塊世代教職員の大量退職等への対応として、教員の新規採用数が増加している状況に伴い、初任者や若手教員の能力・資質向上のための研修を強化させることが重要な課題である。これに加え、数少ない中堅の教職員が管理職につき、若手教員への指導を余儀なくされる状況も鑑み、その支援体制を早急に整備することが必要である。このために、各種研修システムを、大学等の高等教育機関と連携して作成し、実施することが期待される。

第七に、事業点検・評価の方法については、項目や分析方法を全国調査に合わせて設定し、比較分析できるようにすることが望ましい。また、目標値の設定基準の根拠を明確にすると共に、目標値の軌道修正を行うためのルールをつくることも必要である。例えば、2～3年間という比較的短い期間で中間評価を行い、達成値と目標値とのずれについて検討し、目標値の見直しを行うこと等である。さらに、経年変化と、目標値との比較のみに固執することなく、数値だけによらない、記述による継続的評価方法についても検討することが重要である。

以上を踏まえ、平成 24 年度に千葉市教育委員会が執行した「目標 1 未来を担う人材を育成する」に関わる事業については概ね良好な成果を得ているものとする。一方で、市民の期待に応えるためには、事業実施に関連した点検・評価を明確に位置づけ、教育施策の充実に繋げていくシステムづくりを考えていかなければならない。子どもたちが生きていく明るい未来を見据え、学校教育等を充実し、推進することにより、学校・家庭・地域・行政の連携に基づき、学力や体力の向上、心の教育の充実、教育環境や安全対策の整備・拡充、教職員の研修や支援体制の充実等に対する長期的展望のある改革の企画・推進が期待される。

○ 岩崎委員

千葉市教育委員会が設定した「目標 2 生涯を通じた学びを支える」に該当する生涯学習・社会教育振興事業は、第 4 次千葉市生涯学習推進計画に基づき、公民館、図書館、生涯学習センター、博物館等の学習支援施設での取り組みとその実施状況に関し、事務点検・評価がなされている。それぞれの施策について、目標値に対する達成値を見れば、多くは達成されており、目標値に向かって積極的な取り組みがなされていることが推察される。目標値は、設定する段階での現状把握、そして、達成された場合、達成されなかった場合の要因を振り返り、それぞれの施策を改善するためのひとつのツールである。特に達成されなかった場合

は、最終目標値の新たな設定を含め、その検討過程で明らかになったことを関係者で共有し、改善点を協議して次の施策へ有効に活かしていくことが肝要であろう。

これまで、生涯学習に関わる千葉市の学習支援施設、そしてその活動を視察させていただいてきた。いずれの施設も、与えられた使命に基づき、市民の生涯学習のために誠実に活動している様子が伺えた。その取り組みに一定の敬意を表するとともに、今後、益々求められる生涯学習施策への期待を込めて、いくつかの観点について意見を述べたいと思う。

1 施設間のネットワークや地域人材の活用について

国立社会保障・人口問題研究所の人口推計によれば、2060 年の日本は、総人口が現在よりも 3 割以上減少し、1 億人を大きく割り込むことが予測されている。総人口の減少とともに、人口構成を見れば、年少人口（0-14 歳）は全体の 9.1%、生産年齢人口（15-64 歳）は 50.9%、老年人口（65 歳以上）は 39.9%となるとされる。つまり、生産年齢人口は 2060 年には全体の約半分となる。このことは、財源、人材、あらゆるリソースの減少を推測させる数字である。

現状としては、公民館、図書館、生涯学習センター、博物館等のいずれもが学習プログラムを行い、一部の施設とのみ連携が図られているが、リソースが減少する中で、従来の水準を維持した住民サービスを提供しようとした場合、それぞれの施設の人員・予算減の中で十分な対応をすることは困難になると思われる。そのため、学習支援施設のみならず、学校にあっては、施設を外に向けて開き、公共施設間の連携や外部の人的・物的リソースを導入することが一層肝要となる。たとえば、千葉市立郷土博物館は、一部市民の寄贈を受け適宜展示しているとのことであるが、このようなことは外部の物的リソースを導入している例である。

今後は、このような人的・物的リソースの共有や外部導入のため、施設間、地域社会、NPO、企業とのネットワーク化が求められ、そのための千葉市としての全体構想が必要となるであろう。このことは、ネットワーク型行政という名称で、生涯学習の振興や社会教育行政の在り方として、これまで国の審議会でも示されてきたところである。

2 デザイン性に富む居心地の良い空間づくりや企画

公民館等の多くの施設は、老朽化に伴い、設備の改修が予定されているとのことである。学校、病院、公民館等、公共施設の多くは、無機質で規格化された建物が多い。しかし、改修の機会にあっては、耐震性といった安全性とともに、家庭、学校や職場とは別の居心地の良い空間として、建築、空間、調度のデザイン、色彩、美しさも考慮することが必要である。このような観点は、わが国の公共施設であまり配慮されてこなかった点である。しかし、欧米諸国の施策を見れば、住民がくつろげるデザイン性を持った公共施設の例が多く見られ、また、人々がアクセスしやすい駅、商業地の立地や、住民サービスの出張所との複合施設化といった集客の重視といった観点も見られる。千葉市中央図書館や生涯学習センターが入る複合施設は、千葉市の施設の中でこのような例であるが、その他の施設でも、限られた予算とはいえ、市民にとって利便性が高く、明るく居心地の良い環境や機能、デザイン性を視野

にいった改修が必要とされるであろう。

公民館を視察し、公民館が地元の人々の憩いの場であり、子育て期の母親、専業主婦や高齢者が経費をかけずに趣味や教養、今日的課題等を学べる学習の場になっていることを痛感した。このような公民館の物理的「場」としての機能は今後も維持すべきである。同時に、市民の学習ニーズは多様であり、市民として自発的に活動ができる層に対する学習支援も今後ますます重要となるであろう。このような層は、一般には時間的制約がある層であり、多様な場所・時間帯での柔軟な学習を希望する傾向がある。そのため、公民館は、NPO等と共同することで、時に公民館施設を離れ、他の施設や市の持つ有形無形のリソースを活用したダイナミックな企画や運営を行うことも一考であろう。このような企画のデザイン性やコンセプトの現代性も今後意識されるべきところである。

3 生涯学習の観点からの学校教育を考える必要性

これからの子どもたちは、変化の速さと定まった展望なき中、未来を生きていかなければならない。このような中で、今後の学校教育の在り方について所感を何点か述べたい。

第一に、学校教育は、未来の社会を想定し、未来の構成員となる子どもたちを教育する。しかし、学校教育も教員も、実際には、現実社会から離れ、社会の変化から距離がある。そのため、変化の激しい現代にあっては、学校支援地域本部や社会教育団体を活用する等、地域社会や外部リソースを取り入れ、学校、教員、子どもたちが現実社会とつながる仕組みづくりが必要となるであろう。このことは、教員にとっても社会とのネットワークを構築する機会にもなる。

第二に、これからの学校では、将来が不確かである現実社会を生き抜く力を、子どもたちに確実に身に付けさせることが、教育の主たる目的の一つとなるであろう。このことは、子どもたちに、主体的に自分で考え、学ぶ力、つまり、自立・自律的に学習を行える学習スタイルやスキルを身に付けさせることである。なぜなら、今後、彼らがどのような状況の変化に直面しても、必要な時に必要な知識・技能を自分で獲得することができるのであれば、その状況に対応し、危機を回避できる可能性が高くなるからである

第三に、インターネットやスマートフォンで分断された知識が一方的に提供される時勢にあって、読書教育を通じて知識をつなぐストーリー力、自分で語り表現し他者とコミュニケーションする力、そして自然体験活動による実際的な問題解決能力・分析能力の育成が、知識を確実に定着させることとなり、最終的には学力向上のために一層求められていくことであろう。

千葉市の教育全体を瞥見し、以上の三つの観点について、非常に有意義な試みが多くなされており、関係者の努力は並々ならぬものがある。課題は、そのような個別の貴重な試みを体系化し、千葉市としての独自のストーリーとして、どう意味づけるかである。教育の実績のある千葉市であるゆえに、今後も教育に重点を置いた施策が、現代的な変化を勘案しながら充実してなされることを期待する。